

[研究ノート]

若者の自然会話における「の(〇)」の伝達的機能 —男女間の使用差と「んだ(〇)」との機能分担に着目して—*

市村葉子・堀江薫

名古屋大学大学院・名古屋大学

This study discussed the division of the communicative functions of *no* (〇) and *n da* (〇) used in natural conversations of the youth. It was found that *no* (〇) was used for “explanatory *no da*” and “interrogative *no da*” while *n da* (〇) was used for “discovery *no da*.” Furthermore, there was no significant difference in the usage of between men and women.

キーワード：「の(〇)」、「んだ(〇)」、伝達的機能、性差、若者の自然会話

1. はじめに

ノダ文は「かなりの頻度で日本語のディスコースの広範囲にわたって使用されている」(メイナード 2005: 356)。しかし当該文の使用実態を調査し、個別の形式の性質について記述した研究は管見の限りない。特に文末詞¹が後接しない(以下、「(〇)」と表示する)裸の形式「の(〇)」「んだ(〇)」「んです(〇)」の差は「基本的に文体差であり、機能はほぼ同じである」(日本語記述文法研究会 2003: 195)と記述されるにとどまり、詳細に性質の違いを論じた研究は少ない。さらに、当該形式の性差については、平叙文の「の」は話し手が女性に限られる(野田 1993)といった記述があるが、筆者の内省では男性にも使用が観察される。そこで、本研究では名嶋(2007)の記述するノダの機能を援用し、若者の自然会話で使用されるノダ文の、特に「の(〇)」「んだ(〇)」の観察を通じて、「の(〇)」の伝達的機能及び男女間における使用差について論じる。

* 本稿は第16回日本語用論学会年次大会で口頭発表したものを加筆修正したものです。発表時に貴重なご意見をくださった方々に感謝いたします。編集・査読委員の先生方には多くの有益なご助言、ご教示を賜りました。この場を借りて感謝の意を申し上げます。

¹ 本稿では、「っけ」等文末に現れる形式を総称し、文末詞という用語を用いる。

2. 問題の所在

ノダについては多くの研究の蓄積があるが、本節ではノダの伝達的機能に注目した名嶋(2007)を中心に取り上げる。なお、本研究では「伝達的機能」を「言語形式そのものの機能ではなく、その「使用」が何らかの意味を派生的に伝達する」(名嶋 2007: 118) こととする。名嶋(2007)では、ノダは発話された表出命題そのものには関与せず、「表意」「推意」「高次表意」の三つのレベルにおいて、聞き手の発話解釈を制約する手続き的意味を持つとし、その機能を「ある命題を「聞き手側から見た解釈として」「意図的に、かつ、意図明示的に」「聞き手に対して提示する」」(p. 83) と規定した上で、「説明のノダ」及び「発見のノダ」の伝達的機能を記述している。

(1) B1: (A が外を見て「あ、まいったなあ」と言った) えっ、何?

A: 雨が降っているんだ。

B2: へえ、雨が降っているんだ。 (名嶋 2007: 145 (23))

この場合、Aの「んだ」は「当該命題(「雨が降っている」)を聞き手に解釈として受け入れさせよう」という話し手の聞き手に対する発話意図を聞き手に伝達する「説明のノダ」である。一方、それを受けたB2の「んだ」は、当該命題を自身の思考に登録したことを当該発話の受信者に伝達する「発見のノダ」であり、独話でも使用可能であるという。こうした区分は話し手の発話意図を探る上で示唆的である。ただし、名嶋(2007)も含め、従来の研究はノダの本質及び伝達的機能については多くの知見が得られるものの、「のだ」の変異体とされる「の(の)」と「んだ(の)」にどのような伝達的機能の違いがあるのかについての記述は管見の限りほとんど見受けられない。自然会話で使用される両形式の機能分担が仮にあるとするならば、それを記述することは母語話者の伝達方略についての新しい知見を提供できるものと考えている。

次に、「の(の)」の性差について考える。野田(1993)は、(2)(3)は「文体差以外の違いはない」(p. 43)とし、両者の違いは(2)は話し手が女性に限られ、(3)は主に男性が用いるということだけであろう(p. 44)と述べている。

(2) 明日、休むわよ。用事があるの。 (野田 1993: 44 (1))

(3) 明日、休むよ。用事があるんだ。 (野田 1993: 44 (2))

当該の「の」「んだ」は先述した「説明のノダ」に該当するので、「説明のノダ」を使用する場合には両形式に性差がある、ということになる。一方、疑問文における「の」については使用に性差はないとし、「「の?」は男性も自然に用いることができる」(野田 1993: 47)としている。確かに筆者の内省でも、「明日は休みなの。」といった言い方は女性的な印象を受けるが、現代語においても平叙文の「の(の)」が女性特有の言い回しなのか、と

いう点についてはいずれの先行研究にも明確な記述がない。

以上の点を踏まえ、本研究は「の(〇)」が観察されやすく、かつ参加者間で類似した使用が予測される、立場が同等の若者同士が行った自然会話に注目して「の(〇)」の伝達的機能及び各伝達的機能における男女間の使用差について考察する。

3. 調査概要と結果

3.1. 調査概要

調査概要を以下に示す。

調査目的： (i) 自然会話における「の(〇)」、「んだ(〇)」の使用分布を明らかにする。
(ii) 男女間における「の(〇)」使用の差異を記述する。

調査資料：「BTSJによる日本語話し言葉コーパス 2011年版」の友人（主に大学（院）生）の雑談、（男性4時間50分、女性4時間52分）合計9時間42分

調査手順： 第一段階：調査資料からノダ文を抽出し、3種類のノダに分類する。
第二段階：各ノダにおける「の(〇)」、「んだ(〇)」の使用分布を調査する。
第三段階：男女間における「の(〇)」の使用実態を調査する。

3.2. 調査結果

3.2.1. 分析対象数及び使用されたノダ

まず、文末に使用された常体のノダ文をすべて抽出し、分析対象である「の(〇)」及び「んだ(〇)」の使用分布を調査した。抽出したデータのうち、音声不明瞭なためトランスクリプトが明記されていないもの、「と思った」のような引用形式が付加されているものは対象外とした。結果は表1の通り、全体の88.2%が分析対象となった。

表1 使用されたノダの総数と分析対象数

	男性	女性	合計
総数	971	1036	2007
対象数	849 (87.4%)	922 (89.0%)	1771 (88.2%)

次に、対象となったノダの上位3形式を調査した（表2）。表1及び表2から、「の(〇)」は本調査で使用されたノダ中、男女とも最も多く使用されている形式であり、男性は全体の

表2 使用されたノダ（男女別、頻度順）

	男性	女性
1	の(〇) (285)	の(〇) (374)
2	んだよ / のよ (100)	んだ(〇) (119)
3	んだ(〇) (96)	んだよね / のよね (106)

33.6%、女性は40.6%を占めることがわかった。一方、「んだ(〇)」の使用数は男女とも「の(〇)」の3分の1程度であった。

3.2.2. 「の(〇)」及び「んだ(〇)」が使用される場面

次に、本資料で使用されたノダを平叙文のノダと疑問文のノダの2種類に類型化した後、平叙文のノダを「説明のノダ」「発見のノダ」に下位分類し、「の(〇)」と「んだ(〇)」の使用分布を調査した。以下、用例²とともに示す(下線全て筆者)。

- (a) 説明のノダ：「(当該命題を)解釈として受け入れさせよう」という話し手の聞き手に対する発話意図を聞き手に対して伝達する。

(名嶋 2007: 146 (25))

- (4) 384 → F19 : なんかー、あたしもー、こう、就職活動しててさ(うーん)、自分が思ってる自分とー、他人から見ると自分はかなりギャップがある、ってことに気づいたの。 =

385 → : =なんか、私、って、まずなんか、黙ってるとさ、怒ってるように見えるらしいの。 (女性)

- (5) 227 M09: “おれは、人より勉強しないで、人の9割をとるおこと‘男’だから”とか言ってた。

228 : あれ?

229 → M10: ちがう、あのね一人の1割勉強してー、5割の点数取るつつたの。

230 M09: <軽く笑う>

231 → M10: で、“5割じゃだめじゃーん”とか言ってたの。 (男性)

- (b) 発見のノダ：話し手が当該命題を話し手の思考に登録したことを当該発話の受信者に伝達する。 (名嶋 2007: 118 (40))

- (6) 774 F12 : ((韓国料理を))³ こっちで食べたことないんだけどね。

775 F11 : うん。

² 紙幅の関係上、言い淀みは一部省略している。「<>」は同時発話を示す。「=」は改行される発話と発話の間が当該の会話の平均的な間の長さより相対的に短い、全くないことを示す。通常とは異なる発音がなされた場合など、音の表記だけでは意味が分かりにくい発話は、「‘ ’」の中に正式な表記をする。その他の文字化に関する詳細は「基本的な文字化の原則 2011年版」(<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj2011.pdf>)を参照されたい。

³ 「(())」は、筆者による補足であることを示す。

776 F12 : 高いからさー。

777 : 韓国の、2倍なんだよね、値段が。

778 → F11 : そうなの。

779 F12 : <ちょうど2ばん‘倍’><{<}>。

780 → F11 : <あ、安いんだ><{<}> 向こう。 (女性)

(7) 88 M15 : なんか、「人名3」がさ、車もってんだけど(うん)、<それ><{<}>
[[。

89 M16 :]> <なん><{> > だっけ、プレ、プレセアだっけ?。

90 M15 : あれはねー(うん)、つぶしちゃったんだよ、<事故で><{<}>。

91 → M16 : <あ、そう><{> > なんだ。

92 M15 : うん。

93 : 廃車んなっちゃってー。

94 → M16 : =事故ったんだ、あいつ。 (男性)

(c) 疑問文のノダ : 聞き手の発話を解釈するために必要な情報を求める。もしくは、聞き手に対して自身の解釈の妥当性を確認する。

(8) 675 M05 : だ、「学科名4」ねー、ぶっちゃけ、((好みの女の子が)) 誰も今はいないんだよなー。

676 → M06 : 誰がいいの?。

677 M05 : 「学科名4」?。

678 M06 : うん。

679 M05 : いない。

680 → M06 : 全然いないの?。

681 M05 : 正直、今ところ、いないけど。 (男性)

特に「の(の)」については、「発見のノダ」か疑問文のノダかの判断が困難な場合もあった。その場合には文末の「?」、及び上昇イントネーションを示す「↑」の有無を判断基準とした。つまり、(6) 778は「発見のノダ」、(8)は疑問文のノダとした。⁴

3つのノダの出現数を表3に示す。調査の結果、男女とも「の(の)」は「説明のノダ」及び疑問文のノダとして、「んだ(の)」は「発見のノダ」として使用される傾向があったが、「説明のノダ」は使用数に差が見られ、女性の使用が男性の約2.6倍観察された。

⁴ 実際には疑問文のノダ及び平叙文の「発見のノダ」のいずれの機能も担う場合もありうるが、複数の機能を担うノダについての考察は、別稿に譲りたい。

表3 各ノダにおける「の(〇)」及び「んだ(〇)」の出現数 ()内は%を示す

	男性			女性		
	の(〇)	んだ(〇)	計	の(〇)	んだ(〇)	計
平叙文(説明)	66 (79.5)	17 (20.5)	83 (100.0)	171 (94.0)	11 (6.0)	182 (100.0)
平叙文(発見)	14 (15.9)	74 (84.1)	88 (100.0)	11 (9.3)	107 (90.7)	118 (100.0)
疑問文	205 (97.6)	5 (2.4)	210 (100.0)	192 (99.5)	1 (0.5)	193 (100.0)

表4 「説明のノダ」に使用されたノダ形式 表5 「発見のノダ」に使用されたノダ形式

	男性		女性
1	んだよ/のよ(94)	1	の(〇)(171)
2	の(〇)(66)	2	んだよ/のよ(55)
3	んだよね(55)	3	んだよね/のよね(46)

	男性		女性
1	んだ(〇)(74)	1	んだ(〇)(107)
2	の(〇)(14)	2	のか(12)
3	のか(8)	3	の(〇)(11)

次に、各ノダで使用された形式を調査した。上位3形式と観察された数を示す。表4、5、6から、男性は「説明のノダ」に「んだよ/のよ」を最も多く使用していたが、それ以外については「説明」及び疑問文には「の(〇)」が、「発見」には「んだ(〇)」の使用が最多であった。

表6 疑問文のノダに使用されたノダ形式

	男性		女性
1	の(〇)(205)	1	の(〇)(192)
2	のか(15)	2	んだっけ(3)
3	んだっけ(10)	3	んだよ/のよ(2)

3.2.3. 「の(〇)」の使用に関する性差

最後に、「の(〇)」使用の男女差の有無について分析を行った。表3で示した通り、先行研究の記述とは異なり、平叙文にも男性の使用が確認された。そこで、男女とも使用が多かった「説明のノダ」の「の(〇)」がどのような品詞に後接するかを調査した(表7)。結果、使用数に差はあるものの、品詞による使用傾向に差は見られなかった。

表7 「の」が後接する品詞 ()内は%を示す

	名詞	な形容詞	い形容詞	動詞	そう	その他 ⁵	合計
男性	9 (13.6)	4 (6.1)	2 (3.0)	44 (66.7)	5 (7.6)	2 (3.0)	66 (100.0)
女性	20 (11.7)	10 (5.9)	12 (7.0)	107 (62.6)	11 (6.4)	11 (6.4)	171 (100.0)

⁵ 疑問詞や助動詞などを「その他」とした。

次に、前接の活用に注目した。筆者の内省では、「の」が女性らしく聞こえる理由の一つとして、「なの」という接続形式が関係していると考えられるためである。そこで、前接する品詞の活用形式（「___の」か「___なの」か）に注目して調査した（表8）。

表8 「の」の接続形式 ()内は%を示す

	の	なの	合計
男性	49 (74.2)	17 (25.8)	66 (100.0)
女性	136 (79.5)	35 (20.5)	171 (100.0)

接続形式に性差が見られるか χ^2 検定を使用して調べたところ、両者に有意差は確認されなかった($\chi^2(1)=0.50$, $p=.48$, n.s.)。

さらに、「疑問文のノダ」における「の(の)」使用の性差の有無について「説明のノダ」同様調査した。「の(の)」が後接する品詞（表9）及び接続形式（表10）を以下に示す。調査の結果、「説明のノダ」同様、前接する品詞は近似しており、接続形式にも有意差はなかった($\chi^2(1)=2.12$, $p=.14$, n.s.)。しかも、筆者の内省に反し「___なの」の使用は男性の方が多いという結果が得られた。

表9 「の」が後接する品詞 ()内は%を示す

	名詞	な形容詞	い形容詞	動詞	そう	その他	合計
男性	22 (10.7)	4 (2.0)	13 (6.3)	121 (59.0)	8 (3.9)	37 (18.1)	205 (100.0)
女性	19 (9.9)	6 (3.1)	11 (5.7)	122 (63.6)	13 (6.8)	21 (10.9)	192 (100.0)

表10 「の」の接続形式 ()内は%を示す

4. 考察

4.1. ノダ形式の使用実態

本調査は主に大学(院)生による友人同士の自然会話に注目し、ノダ形式の使用実態を調査した。調査の結果から、若い世代においては使用頻度の高い形式は近似しており、形式自体は性差なく使用されると考えられる。裸の形式に注目すると、「の(の)」は男女とも最も使用頻度の高い形式であったのに対し、「んだ(の)」はその使用が全体の1割程度であった。この点において、若者の自然会話では「だ」で言い切る割合は男女とも低く、「んだ」を使用する場合には様々な文末詞と複合させて発話する傾向があると言える。今後はさらに幅広い世代を対象にし、本調査の結果の一般化が可能かどうか吟味していきたい。

	の	なの	合計
男性	138 (67.3)	67 (32.7)	205 (100.0)
女性	143 (74.5)	49 (25.5)	192 (100.0)

4.2. 「の(の)」の使用に関する性差

「の(の)」は疑問文に関しては性差なく使用されており、先行研究を支持する結果と

なった。しかし、平叙文における「の(〇)」の使用については、先行研究の記述とは異なり、女性と比較すると数は少ないものの、「男性も平叙文で「の(〇)」を使用する」という結果が得られた。さらに、前接する品詞及び接続形式(「の」か「なの」か)に着目しても、使用傾向に男女の差は観察されなかった。ただし、これは先行研究の記述を否定するものではなく、「従来の考え方では不自然と思われるスタイルがごく自然に使われ、話し手の性別に直結するいわゆる女性語と男性語の差はそれほど顕著ではなくなっている」(メイナード 2005: 4) ためであろう。

また、疑問文と平叙文(「説明のノダ」)で「の(〇)」の使用に差が見られたことについては、以下のように考える。まず、表6で示したとおり、スピーチレベルが「常体」の場合、疑問文のノダには「の(〇)」が多用されていた(男性86.5%、女性96.5%)。この結果は当該形式が「文末名詞化構文」(堀江・パルデシ 2009)であり、名詞述語文同様のスタイルが選好されることを示している。つまり、名詞述語疑問文については性別にかかわらず「金さんは韓国人(か)?」のように「普通体では「か」を付加せず、上昇イントネーションで質問の意味を表すことが多い」(日本語記述文法研究会 2003: 23) ことと同様に、疑問文のノダについても、例えば「昨日用事があったのか」より「昨日用事があったの(↑)」といった発話スタイルが性別に関わらず選好されるのであろうと推察される。

一方、平叙文の「説明のノダ」は使用数に男女差が認められた。この「説明のノダ」の異形態に注目すると、「の(〇)」以外は「んだよ」「んだよね」のような、「んだ/の+文末詞」という形式であった。次に、使用数に注目すると、女性は「の(〇)」、男性は「んだよ/のよ」を最も多く使用していた。従って、男性は「説明のノダ」として「んだよ/のよ」を選好する傾向にあるため、使用数に差が生じたと推察される。

また、「んだ/の+文末詞」の具現化形式については、女性も「んだよ/のよ」を多用していたが、男女ともに両形式の使用数については差が見られ、男性が94発話中88発話(93.6%)、女性が55発話中41発話(74.5%)に「んだよ」を使用していた。この結果は、「説明のノダ」として「んだ」を使用する場合には、裸の形式を回避し、何らかの文末詞を共起させる傾向にあることを示唆している(4.3.1で後述)。

4.3. 自然会話における「の(〇)」及び「んだ(〇)」の使用分布

4.3.1. 「んだ(〇)」の伝達的機能——「だ(〇)」が示す意味——

本研究ではノダを平叙文の「説明のノダ」「発見のノダ」及び疑問文のノダに類型化し、使用実態を調査した。その結果、両形式ともすべてのノダで使用が観察されたものの、その使用分布には違いが見られた。つまり、本調査においては「説明のノダ」及び疑問文のノダには「の(〇)」が、「発見のノダ」には「んだ(〇)」が選好され、以下のように伝達的機能の使用に関する傾向差が見られた。

(9) 「の(〇)」: 説明のノダ、疑問文のノダ 「んだ(〇)」: 発見のノダ

メイナード (2005: 344) によると、「だ」は「肯定的な断定を通して強く言い切る機能を持ち、「その言語行為が意図的に断定されるものであることを伝える」形式である。従って、「説明のノダ」に「んだ(〇)」を使用すると、聞き手に対し当該命題を解釈として(いわば強制的に)受け入れさせようとする態度を明示することになるが、聞き手に対する配慮により、こうした態度は回避されるものと考えられる。

一方、「発見のノダ」には「んだ(〇)」が多く観察され、「の(〇)」との差も顕著であった。「だ」は「断定」ではなく、「話の現場で主体が経験している心理状況や内面的な経験をそのまま表現するときに、その指標として使われ」(メイナード 2000: 197)る場合もある。従って、「んだ(〇)」は話し手の認知環境が変化したという態度を聞き手に明示することができるため、「発見のノダ」として使用されやすいものと思われる。

4.3.2. 「の(〇)」の伝達的機能——「聞き手配慮」と「聞き手目当て性」——

3.2.2. で示した通り、本調査において「の(〇)」は「んだ(〇)」とは対照的に、性別に関わらず平叙文の「説明のノダ」及び疑問文のノダとして使用され、さらに「んだ(〇)」だけでなく、他のノダ形式と比較しても選好されることがわかった。疑問文のノダは先述のとおりであるが、「説明のノダ」に当該形式が選好されるのは、当該形式が先述した「聞き手の発話解釈を制約する」手続き的意味を有するものの、断定を意図する「だ(〇)」を伴わないという点で聞き手配慮が含意されるためであると推察される。

さらに、堀江・パルデシ (2009) は、「文末名詞化構文」は、「だ」「です」のようなコンピュータを伴う場合と、伴わない場合があり、「機能的にはまったく等価ではなく、微妙な相違がある」(p. 94) とし、「コンピュータを伴わない文末名詞化構文は、コンピュータを伴った用法と意味的な連続性を持ちつつも、話し手の聞き手に対する何らかの働きかけ(「聞き手目当て」)の意味がより明確になり、使用文脈による語用論的解釈の幅がより広くなるという「語用論的富化」の傾向が推察される」(p. 95 下線筆者) と、「の(〇)」が「説明」以外のモダリティ要素を有することを指摘している。この知見を援用すると、「の(〇)」が聞き手の存在を前提とした場面で使用されやすいのは、「だ」を伴わないことにより生じる語用論的富化によるものと思われる。

以上の点から、若者が使用する「の(〇)」は「だ」を伴わないことにより「聞き手配慮」及び「聞き手目当て」という意図が含意されるため、「説明のノダ」及び疑問文のノダとして使用されやすい形式であると結論づけた。

5. おわりに

本研究では、若者の自然会話コーパスを用いて「の(の)」の伝達的機能、男女の使用差を記述した。従来「のだ」の変異体と位置づけられていた「の(の)」と「んだ(の)」について、両形式の伝達的機能の使用分布に違いがあることとその理由、さらに若い男性は平叙文でも「の(の)」を使用することを指摘した。今後はさらに幅広いデータを収集し、世代に関わらず同様の現象が観察されるかを調査したい。

参考文献

- 堀江薫・バルデシ・プラシャント. 2009. 山梨正明(編)『言語のタイポロジー——認知類型論のアプローチ(講座 認知言語学のフロンティア 5)』東京: 研究社.
- メイナード・K・泉子. 2000. 「「だ」文と「じゃない」文」、『情意の言語学——「場交渉論」と日本語表現のパス——』、189-220、東京: くろしお出版.
- メイナード・K・泉子. 2005. 『日本語教育の現場で使える 談話表現ハンドブック』東京: くろしお出版.
- 名嶋義直. 2007. 『ノダの意味・機能——関連性理論の観点から——(日本語研究叢書 19)』東京: くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会(編). 2003. 『第8部 モダリティ(現代日本語文法 4)』東京: くろしお出版.
- 野田春美. 1993. 「「のだ」と終助詞「の」の境界をめぐる」、『日本語学』、vol. 12、No. 11、43-50、東京: 明治書院.

調査資料

- 宇佐美まゆみ監修. 2011. 「BTSJによる日本語話し言葉コーパス(2011年版)」『人間の相互作用研究のための多言語会話コーパスの構築とその語用論的分析方法の開発』平成20—22年度科学研究費補助金基盤研究B(課題番号20320072)研究成果.